

CONTENTS

建設技術センター業務紹介

山口県の土木遺産 旧小郡町上水道貯水池跡(後編)

編集後記

この情報誌は土木技術に関する様々な情報を、山口県及び市町の土木技術職員の皆様方に提供するものです。



●主要県道光上関線(上関大橋)橋梁補修工事

建設技術センター業務紹介

◆建設技術センターの業務について

平成23年度情報誌41、42号で業務部、技術部の業務内容について紹介いたしましたが、今回は、工事管理部の業務内容についてお知らせします。

建設技術センターは、以下の3部で構成されています。

業務部

技術部

工事管理部

●工事管理部の仕事

工事管理業務は、公共工事の発注者として、長年にわたり、技術的実務経験を積んだ担当技術者が業務をおこなうことにより、監督職員を支援するとともに、工事受注者に対し適切な指導、助言をし、公共工事における十分な安全、品質確保等を図ることを目的としています。

工事管理業務は、右図のとおり「施工管理業務」と「施工体制チェック業務」があります。

「施工管理業務」は、皆さんが行うものと同様な立会・検測・材料検収・品質管理などを行っています。

具体としては、以下のとおりです。

- ・コンクリート打設状況把握(チェックシートにより報告)
- ・各種材料検収 ・配筋検査、型枠検査
- ・鉄筋溶接確認 ・コンクリート圧縮強度試験立会
- ・吹き付け法枠工配合、鉄筋組立立会
- ・プルーフローリング
- ・各種杭基礎打ち込み立会、床掘確認 etc.

工事管理業務

工事管理業務	
施工管理業務	施工体制チェック業務
・出来型管理	・技術者の常駐状況
・品質管理 他	・施工体制台帳の点検 他

「施工体制チェック業務」では、定期的にパトロールし、安全確認等を行うとともに、専任の監理・主任技術者の常駐状況の確認、下請け状況のチェックを行っています。

先頃開通した小郡萩道路の施工体制チェック業務も行ってまいりました。

平成22年度における施工管理業務は、県事業96件、市町事業2件、施工体制チェック業務は、県事業53件について行いました。

委託については、12月中旬に、各発注機関からの次年度要望をとりまとめているが、当初計画に挙げていなかった現場でも、打合せのうえ、随時対応していきます。（ただし、年間契約の範囲内での業務となりますので、各現場における工事管理の頻度の差は出てきますので、ご了承下さい。）

また、若手職員が担当する現場の指導、遠方で監督職員の目が行き届きにくい現場等ニーズに応じていきますのでよろしくお願いします。

半年とか通年の工事管理でなく、ピンポイントの工事管理でも出来る限り対応できるよう努力しますので、ご相談ください。

その他、検査補助を行う業務もありますので、ご相談下さい。

市町の検査業務の一部を補完・支援する検査補助業務を行います。業務の流れ等については、山口県建設技術センターホームページや業務案内をご覧ください。



深礎杭床掘確認



砂防堰堤コンクリート打設立会（早朝より対応）



詳しくは、
建設技術センターホームページやパンフレットをご参照ください。

山口県建設技術センター ホームページ <http://www.yama-ctc.or.jp>

山口県の土木遺産 ～旧小郡町の上水道貯水池跡(後編)～

所在地：山口市

前号に引き続き、県内2番目の水道である旧小郡町の水道施設を紹介します。大正12年に小郡町に水道が整備されたことは前号に述べたとおりですが、小郡町の発展に伴い、水道工事完了後、すぐに拡張工事の声がかえ始めました。後編では小郡町の発展に伴い昭和3年に増設された貯水池、羽根越堰堤を紹介します。

小郡町の発展を語るには鉄道の延伸を抜きにはできないので、簡単ではあるが、当時の鉄道の状況について説明する。小郡駅（現、新山口駅）は、明治33年の山陽鉄道の三田尻～厚狭間開通に伴い開業し、明治34年に下関～神戸間が全線開通したことにより、東京～下関～釜山（現在

の韓国）の交通網の一部となった（東京～神戸間は明治22年に開通済み）。ちなみに、山陽鉄道は明治39年に国有化されている。

水道ができた大正12年3月以後、同4月に山口線小郡～益田間が全線開通し、大正14年3月に宇部軽便鉄道が小郡まで延伸し宇部～小郡間が開通、交通の要衝としての小郡の重要性はますます高まった。当時は現代のような車社会ではなく鉄道社会であったことから、鉄道の整備が小郡町の発展をささえたのである。

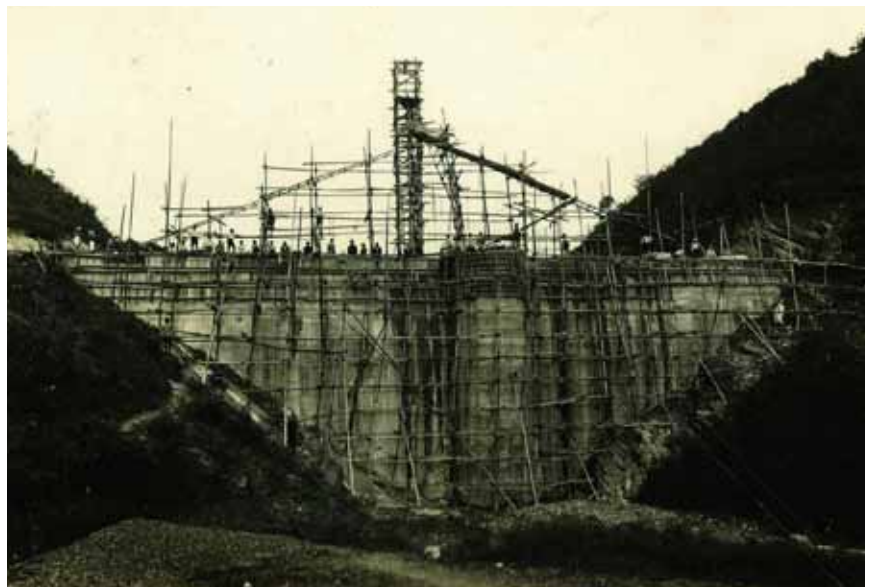
さらに防府にあった三田尻機関区の小郡への移転も計画され（移転は昭和3年4月）、水道の拡張工事（供給水量の増加）が求められた。当時の鉄道は蒸気機関車であり、

旧小郡町の上水道貯水池（堰堤）跡



機関区が設けられるということは蒸気機関車用の大量の水が必要となるということであった。また、駅職員増加により小郡町の人口も増えることから、その分の水も必要となる。そのため、小郡町は昭和2年4月に水道の拡張工事に着手し、昭和3年3月に工事は完成した。

拡張工事の内容は、羽根越川に新たな貯水池（羽根越堰堤：所在地は宇部市小野）を築造し水量確保を行うとともに、既設の浄水池・配水池の側に、新たに浄水池・配水池を増設するものであった。鉄道会社から水圧不足に関する要望があったため、既設より20m高い場所に高部配水池を増設し、既設配水池から高部配水池へ揚水するための施設を作ることにより、要望に対応している。この時作られた羽根越堰堤の規模^(注)は、高さ18.2m、長さ44m、有効貯水量102,815 m^3 で、事業費の最終精算額は134,415円、財源は前回と同じく起債と県の補助金で賄われた。開業時の水を湛えた貯水池の写真と現在の写真を示す。



工事中の堰堤



開業時の貯水池



現在の貯水池

堰堤以外に当時の施設として、古い水道栓を紹介する。場所は山口市小郡下郷にある正福寺というお寺の側である。開業時の給水形態は前号で書いたとおり、大半の住民は町内各地に設けられた給水栓から無料で給水を受ける（放任給水）というものであった。写真にある給水栓は、そうした給水栓の1つである。残念ながら、この給水栓が開業当初に設けられたものなのか、その後増設されたものなのかは、確認できなかった。



給水栓

余談であるが、水道整備を進める上で、水源地を探すのに当時の担当者は相当苦労したのではないかと考える。水源地選定に関する文献が見つからなかったため詳しくは分からないが、当時も今も、こういう問題に関する土木担当者の苦労は相当なものである。というのも、水道の水源地、水質は当然のこととして、相当量の水量が必要になるからである。現在よりも農業用水の水利権等、水利用に関する考え方が厳しかった当時、川から取水することの地元理解を得るということは簡単な事ではない。小郡町の水道事業では水源地選定と地元交渉について記載された記録が確認できなかったが、県内の他の水道事業では水源地問題で苦労したという話が報告されている。明治39年完成の県内最初の水道である下関市の水道は、下関市内日（当時の内日村）に貯水池を作るにあたり、貯水池下流の農民から水利権問題で強い反対があり、当時の内日村の村長がその説得に尽力したとの記録が残っている。また、昭和12年完成の山口市（旧山口市）の水道は仁保川の伏流水をくみ上げて水源としているが、やはり下流水利権者から反対があり、内務大臣を被告とする行政訴訟にまで発展し、最終的には、山口市や当時の平川村、大歳村（ともに現在、山口市）の村長の努力により解決に至ったとのことである。

今回、紙面の関係で紹介できなかった当時の図面や工事中の写真等が山口市に保管されています。興味がある方は、山口市教育委員会へお問い合わせ下さい。

（注）・・・堰堤の規模については、文献により数字が異なっているが、ここでは、「山口県の近代化遺産」によるものを掲載した。

としあな

取材協力：山口市教育委員会文化財保護課

参考文献

日本水道史 各論編Ⅲ 発行：日本水道協会
町制100周年記念写真集 ふるさと小郡の記憶

発行：小郡町

小郡町史 発行：小郡町役場

（昭和8年、昭和32年、昭和54年）

ふるさと小郡たずねる記100選

発行：小郡ふるさと探訪協議会

山口県の近代化遺産 発行：山口県文化財愛護協会

昭和二年十月小郡町上水道拡張工事記念写真帳

としあな

編集 後記

この編集後記を書いているのは「おいでませ！山口国体」開催直前にあたります。そして、この記事が皆さんのお手元に届く頃には国体も終了し、業務も平常に戻っている頃と思います。国体で、どんな活躍があり、どんな思い出ができたか、この記事を読んでちょっと国体のことを思い出してはみてはいかがでしょうか。

【Eメールアドレス】 info@yama-ctc.or.jp

【ホームページアドレス】 <http://www.yama-ctc.or.jp>

〒753-0073 山口市春日町8-3春日山庁舎

（財）山口県建設技術センター 情報誌編集委員会 宛

【TEL】 083-920-1233 【FAX】 083-920-1288